

祖の『選択集』の本義を闡明し、浄土真宗の正意を顕彰するのが本鈔撰述の意趣であると窺うことができる。

凡そ宗祖の和文漢文の撰述のいずれもが、自信教人信報仏恩の信仰披瀝でありつつ、その信仰披瀝はその当時の時代や教界、教団の動向に対する宗祖の鋭い批判と深い見識が内在している。元祖の浄土宗独立以来、浄土教に対する法難は度を加え、承元・嘉祿の法難に限らず、聖道諸宗の圧迫は日を追って厳しく、宗祖の胸にひしひしと迫るものがあつたであらう。而して元祖滅後の浄土教界は漸次一念義・多念義に偏する偏見と共に混乱に陥り、元祖の聖淨相對、行々相對の批判は乱れ、諸行の復活に却つて力をつくすこととなり、選択本願の真意は次第に見失なわれていった。建長四年の消息である『末灯鈔』十九・二十通には、元祖の遺弟が師の教義を変じていくのを宗祖は悲歎されている。このことは必然的に真宗教団へも大きく影響し、有念・無念、一念・多念の諍論となり、更に関東における真言・修験の影響をも受け、善鸞の異義をも惹起し、宗祖帰洛後、特に建長年間以降かかる問題に宗祖は苦心されたようである。宗祖晩年に至つて小部の和・漢文の聖教、消息等が数多く撰述されたのはかかる事由を語るものであらう。

かくて宗祖は当時の教界を顧りみつつ、建長三年頃の有念・無念、同七年頃に起る一念・多念の諍論、更には父子義絶という悲痛な事態にまで至らなければならなかった善鸞事件という宗祖自身の信心をも根底から問い直さしめる異義を契機として、自ら師教に聞き、師教に確かめた自身の領解を記録した原典ともいふべき『愚禿鈔』をここにまとめ、一人たりとも信をとれかしと念じつつ付与されたものと思われる。本鈔が師教を『選択集』に即し

て領解した内容をもちつつ、建長七年の識語をもつ所以もこれによつて領かれよう。

而して本鈔付与の対象は、かかる難解な内容を理解し領受しうるような、例へば真仏、顕智、性信等の如き各地門徒の代表的、指導的立場の限られた人々であつたのではなからうか。

空性・法性・仏性

本学専任講師 古田和弘

「空性」と「法性」と「仏性」とは、仏教の教理史の上でそれぞれに大きな背景をもつ語である。梵語仏教圏でも漢語仏教圏でも、そのおのおのについての教義の発達があつた。従つてこれを一括して考えるなどのことはいささか暴挙に過ぎる感なしとはいえない。しかしながら、仏教の思想の底流というか、非常に大きなところでは、この三義は一つに結びついているように感じられる。いま綿密な定義はともかくとして、その素材な語義を整理すると、「空性」は、一切の事物は因縁の和合によつて成り、我とか実体とか称し得べきものはなく、空として成り立っていることをいふのであるから、その成り立ちを「本性空性」として捉えるのである。「法性」は、すべての事物や現象に本来備わる不変なる本性であつて、諸法の「実相」とされ、また「真如」の異名とされるものである。「仏性」は、仏の仏たるその本性であつて、同時にそれが衆生の生死とかかわりをもつとき成仏の可能性として自覚されるものである。「如来蔵」の異名ともされるが、いまはその議論は省略しておきたい。

さて、少々乱暴な考え方が許されるならば、次のようなことが云えるであろう。「法性」は厳然たる諸法の実性であってあらゆる価値分別を寄せつけないから、価値的にはニュートラルである。これに対して「空性」は本性として空であること、即ち事物の欠如態を指すのであるから、いわば「法性」のネガティブな側面である。また「仏性」は仏の本性への可能性をいうのであるとすれば、それは「法性」のポジティブな面を意味する。『智度論』(卷三三)に、「如」と「法性」と「実相」は「実相」の異名であるとし、膠蠟が火に会って堅相という自性を捨てるように「実相」は、「空性」であると云い、また「法性」は黄石の中に金の性があり、白石の中に銀の性があるように本分の種であって、それは「涅槃」であると述べてある。『智度論』には「仏性」を説かないが、「涅槃」と「仏性」とは後の『涅槃經』によってやがて統合されるから、ここはそのままだ置き換えて考えるなら、これは「法性」を中心に「空性」と「仏性」とを対照的に捉えたものと云えるであろう。

ここで話題を少し限定して中国仏教の教理史を通してこれを眺めると、『般若經』のたび重なる伝訳によって「空性」の探究はすすめられ、それが魏晉仏教の主流を占めたのであった。空について心無義、即色義など諸種の異説があったうち、四世紀末の道安の性空義が最もその実を得たものと評されたが、性空とは本性空寂ということであって「空性」の確認であった。般若研究が盛行したところへ、五世紀初めに鳩摩羅什が『大智度論』を伝え、ここに「法性」の意義が開示され、法性常住の説が明示されたのであった。五世紀中頃には『涅槃經』が伝わり、法性常住、そして一切衆生悉有仏性ということが説かれるに至ったのである。こ

の場合「仏性」は法身の常住、涅槃の空寂ということを通して説かれることが注目されるであろう。『智度論』の法性説は、龍樹の空性思想の到達点であろうけれども、やはり諸法実相の開顯を使命とした『法華經』の一乘真実の主張との関連を見逃せない。諸法の実相は「法性」であり、一乗が真実であるそのあり方は「法性」である。しかも『法華經』の一乗は空を根拠として成り立ち、また一乗は成仏不可能とされた二乗の作仏をいうのであるから、悉有仏性への進展を予想せしめる。『智度論』の「法性」の出どころを經典に返せば『法華經』ということになるであろう。果して、道安の下で性空義を学び、鳩摩羅什の下で『智度論』や『法華經』を学得し、更に『涅槃經』に触れた僧叡は、その『喻疑』に「般若は其の虚妄を除き、法華は一究竟を開き、泥洹は其の実化を聞く。此の三津は照を開き、照して遺すなし」と歎じたのである。

仏教が中国的展開の緒についたとき、教界の指導的立場にあったのは廬山の慧遠であったが、彼は經説を忠実に咀嚼することとまらず、儒家・道家の諸説の複雑に交錯する思想界において、事の真実の大きな筋を捉えようとした人であった。慧遠も道安の門下に育ちのちに鳩摩羅什に書を送って自らの領解の確認につとめた。両者の書簡による質疑応答(大乘大義章)は、法身、つまり法性生身の問題が中心であったが、これは性空義の究明が「法身」「法性」への関心となつて進展したことを意味する。更に慧遠は法性生身の説に基づいて「神不滅論」を提唱した。これは儒家・道家からの仏教の輪廻説への論難に反駁したものであるが、ここに慧遠は輪廻の当体である人間の精神を意味する「神」と、常住不変の法性生身としての「神」とを一語に重ね合わせて論じた。

凡夫の「神」と法身の「神」との融合である。慧遠は『涅槃經』を知ることなく歿したが、既にここに「仏性」への指向性が窺えるであろう。「空性」から「法性」へ、「法性」から「仏性」への流れが見て取れるわけである。

こうして、森羅万象を「空性」として否定的に説き示した大乘仏教の極意は、一旦「法性」という空有を隔絶した如実の相として捉え改められ、それが「仏性」という積極性を以て生死の有情にかかわるのである。このような流れは、単に中国への經典の伝訳という偶然性に属するものではなく、また印度における經典成立史という蓋然性に従うだけのものではなく、一究竟なるものを探求するさまざまな営みの経過に、時に応じて発顕してきたものと考えられる。要するに教義上に強調せられる点が、「空性」「法性」「仏性」と移ってきたのではないかということである。しかし凡夫にとって最も切実な問題は、「空性」でも、「法性」でもなくして、それは「仏性」である。従って成仏の可能性として衆生は「仏性」に期待を抱く。またしばしばその資格を問うことになる。ここに問題がある。もともと期待のあるなしに拘らず「法性」の事実としてそうなっているのが「仏性」である。では何故に期待が起るのか。期待は分別であり計らいである。その期待の虚妄を除くのが般若の「空性」であろう。対極に「空性」を伴わない「仏性」の論は、自ら作り上げた幻映であって「仏性」の実化そのものとは無縁である。しかし「法性」としてそうなっているという事実がある限り、無縁であることもできないのである。

ポリネシア諸語の起源研究に

関する最近の動向

本学専任講師 樋原孝

太平洋の主としてポリネシアで行なわれる多数の言語はいわゆる南島語族に所属する。当該諸語の起源研究に關して、デンブウオルフ（以下デンブと略）以前と彼以後とは、その方法が全く違うように思われる。彼以前は、概して、種々の憶説が行なわれ、その方法は実証論的でなくまた体系的でもなかったと云える。しかし、デンブは、透徹した考え方を以て、いわゆるマライ・ポリネシアの区域で行なわれる多数の言語について、この語族全体の見地から、真に実証論的に体系的な研究を行ない、インドネシア、メラネシア（以下メと略）、ポリネシア（以下ポと略）の三語派の概念を明確に規定し、これを定立した最初の学者であって、今日では彼は南島比較言語学の創始者とされ、これまで当該区域の多くの学者に対して甚大な影響を与えてきた。ともかく、デンブ以来、多くの学者は彼に挑戦し凌駕しようと試みたのである。筆者は、ここで、いわゆるデンブ批判を試みたと思われる多くの学者の種々の見解の中で、特に二三の重要な興味あるものを重点的に採り上げ、私見として抱く仮説（後述の図表）に役立ててみたい。さて、まず第一に、この語族はデンブ以来三語派に区分されるのが通説となっているが、今日でもこれに対する反論・異論がないわけではない。また特に、原語及び祖語の表記法に關して、デンブと同様に三区分法を採っていても、彼とはちがったアメリ